

書 評

杵渕博樹 著

『人類は原子力で滅亡した——ギュンター・グラスと「女ネズミ」』

竹 内 宏

存命のドイツ語圏作家の中で、ギュンター・グラスが最も重要かつ優れた作家の一人であることに疑いを容れる余地はない。にもかかわらず、その作品の多くが、テーマやストーリーの点で難解とは言えないものの、言語の面からも構成上も、読みこなすために相当の精力を要求することもあり、日本では本格的かつ総合的な研究書はほとんどなかった。その意味で今年3月に早稲田大学出版部より刊行された本書は、画期的なものである。タイトルにも表れている通り、論述の中心は、地球規模での環境問題と原子力兵器による人類の滅亡をテーマとして1986年に出版された『女ねずみ (Die Rättin)』であるが、グラスの文学においてこの長編が占める位置を、テーマの上でも、また語り的手法・態度の点からも、他の全作品との関連の中で詳細に論じた、極めて内容の濃い研究書となっている。

まず序章では、ダンツイヒ生まれのこの作家のトランスエスニックな出自を確認し、両親・家族との関係、少年兵としての戦争体験、造形芸術家としての修業時代、終戦直後の罪の意識の芽生えに至る経緯を論じ、以降グラスがドイツの過去と対決しながら、ドイツ人とドイツ社会の欺瞞と罪をグロテスクに描き出すことで作家としての地歩を固めるまでを跡づけている。若きグラスにまつわるエピソードも数多く織り込まれており、非常に興味深く読める序章である。

ついで第一章では、『女ねずみ』を論じた多数の先行研究を幅広くかつ詳細に読み解き、それらを、精神分析の立場からの分析、間テクスト性論によるもの、黙示録文学論、「不条理」論、メランコリー論等に大別して論評を加えており、グラス研究を志す者にとっては、自分の関心と問題意識に応じた研究書・文献を選ぶことができる格好のガイドとして、非常に有用であろう。先行研究を紹介したうえで著者は、本書での論考における方針を次のように提示している。「これまでの研究史では不十分にしか利用されてこなかった切り口、すなわち、テクノロジー批判の文脈と、ジャーナリズム的・マスメディア的リアリティの文脈から、この作品の物語構造とその扱うテーマとの相互関連性および相互規定性に考察を加える。そして最後に〈人類滅亡〉というテーマの文学的意味について論じる。」

第二章以降が本論であり、上述の方針に従って考察が進められてゆく。まずはグラスの中・長編小説の総体における語り手の問題を整理し、そこでの『女ねずみ』の特質と

位置関係を論じているが、その際、『女ねずみ』までの長編に共通する、物語の主人公と語り手の一致に注目し、この語り手の機能の変化を「ヒロイズム」の観点から跡づけている点が、この論考の優れて独創的なところである。この「ヒロイズム」を著者は、主要登場人物の突出した能力や個性に物語の展開が依存する構造と定義しているが、そのような登場人物をして直接あるいは間接に、社会の罪悪を告発させたり欺瞞を暴かせたりするのがグラスの小説作品の本領である。著者は、この「ヒロイズム」が、ダンツイヒ三部作（『ブリキの太鼓』、『猫と鼠』と『犬の年』）、『局部麻酔をかけられて』及び『蝸牛の日記から』、『ひらめ』、さらに『テルクテでの会合』、『頭脳出産』と、作品を重ねるごとに相対化、ないしは解体されてゆき、この解体過程において、『女ねずみ』は画期をなすと論じる。その意味するところは次のようである。ダンツイヒ三部作では、一人称の語り手たちが超人的・アウトサイダー的ヒロイズムを担っているのに対して、続く二作における語り手は小市民社会の枠内でのグラス的「啓蒙」の営みを支える市民的ヒロイズムに変容し、『ひらめ』では、超人的パースペクティヴを備えてはいるもののヒーロー的印象が希薄になり、さらに『テルクテでの会合』と『頭脳出産』においてはヒロイズムはなお弱く存在感は希薄になっている。それが『女ねずみ』に至っては、一人称の語り手は一人乗りの人工衛星に隔離されることで身体性が希薄になり、ネズミの見解に反して人類滅亡をせめて観念の上で否定する抵抗のために物語り続ける執念にのみヒロイズムが見出されるのであって、ここでヒロイズムは解体しつくされているというのである。論考はさらに『女ねずみ』以降の作品にも及ぶ。『鈴蛙の鳴き声』では、主人公たちに一種のヒロイズムが復活してはいるものの、語り手にはダンツイヒ三部作におけるような超自然的な能力は与えられておらず、自らの意思の自由によって啓蒙的メッセージを発することはできていない。複数の語り手が匿名化された『はてしなき荒野』では、ヒロイズムは完全に解体され、『わたしの一世紀』では語り手を基点として作品全体を貫くヒロイズムは問題にもなっていない。『蟹歩きで』においても、物語全体を支える語り手が復活するものの、ヒロイズムの構造は確認できないと論じている。ヒロイズム解体のプロセスを著者はさらに、「語り手の自由と身体性」の観点から跡づけており、この第二章は論考全体の中で最も中心的な位置を占めていると言えよう。

三章と四章では、テクノロジーの進歩、及び映像メディアと文学作品及びメルヒェンとの関連が、『女ねずみ』を中心とし、さらにクリスタ・ヴォルフの『原発事故』とも比較しながら論じられる。核戦争と原発事故という、テクノロジーの暴走をテーマとする両作品においてメルヒェンが果たす機能について、著者は、『原発事故』におけるメルヒェンは、その闇に通じるパワーと、人間に恐怖を突き付けてくる特質を発揮しているとする。一方『女ねずみ』においてグラスは、人間の理性を相対化し、その暴走を食い止める力をメルヒェンに与えようと試みている、と述べている。また、『女ねずみ』の一人称の語り手に、マスメディア経由の情報を受容し続けるだけの現代人の一典型を見て取っている。これは、間接的情報が支配し、自らがコントロールできる情報の割合が低下した現代における、メディアテクノロジー批判の文脈に位置付けることができる。

第五章では、グラスの小説作品における物語を、常に公式の歴史に反抗するためのものであり、従来の作品が専ら過去の歴史を対象にしていたのに対して、『女ねずみ』は物語世界を未来にまで拡大した試みであると論じる。この「公式の歴史に反抗」という語りの態度こそ、グラスのヒロイズムの根幹をなすものである。『女ねずみ』においては、モニター上にそれを証拠立てる映像を次々と呼び出しながらネズミが語る、核兵器による人類の滅亡が（未来にまで拡大された）公式の歴史であり、先述のとおり語り手のヒロイズムは、偏にこの歴史を否定するために語り続けることに収斂している。著者はこの事情を第六章であらためて取り上げ、人類の存続の可能性が確保されるためには、個としての人間が個別の過去の物語を伝え続けることが必要で、それは、絶望と「それでもなお」が相半ばする中であって、『シーシュポスの神話』になぞらえつつ人間と社会の啓蒙を放棄しない、グラスにとっての「文学」そのものの存続に通じる、と結論づけている。つまり、『女ねずみ』の語り手の運命は、まさに「文学」そのものの運命だということである。

終章では、東西ドイツの（再）統一という歴史的大事件に対するグラスの立場を、『鈴蛙の鳴き声（Unkenrufe）』と『はてしなき荒野』を中心に解説している。同い年の作家マルティン・ヴァルザーなどとは対照的に、グラスは拙速なドイツ統一に対しては一貫して反対の立場をとってきたが、その立場が象徴的に表れているのが、惨事を告げる不吉な予言という意味を持つ Unkenrufe というタイトルである。ただしこの呼び声は、統一に向かう陶酔的雰囲気の中でかき消されることになるのだが。

以上のように、この論考は作者グラスの啓蒙・警告の意図に十分な光を当て、作品の構造と手法も詳細に分析することに成功している。この著作の元になっているのは、著者が2009年に早稲田大学に提出した博士論文である。論考の中心を占めている『女ねずみ』は、チェルノブイリの原発事故の8週間前に発表された。優れた作家の想像力・創造力は時に奇跡的な働きをし、グラスはまさにこの事故を予見していたと言えよう。そして著者の博士論文が公刊されたのは、東北で件の大惨事が起きた2011年であり、著者もまた、あとがきでの述懐のとおり、テクノロジーの暴発が招く結果を「知っていた」のである。その意味も含めて、この論考はギュンター・グラスの文学の核心に迫ったものである。論述にはところどころ重複が見られるし、独創的・主観的解釈と実証可能性との間の綱渡りのようにも思えるところも皆無とは言えない。しかしながら、執念を感じさせるほどに原作を読み込んだ上での、深く透徹した洞察に支えられた論述は、やや粘着質な文体が発揮する筆力とも相俟って、十分な説得力を備えている。文学作品は本来、時代背景や社会状況を反映し、またそれとの対決の中で生み出される側面を備えているはずで、グラスの作品にはこの要因が色濃く認められる。もちろんこれは、アンガージュする作家グラスの意図である。詳しくは述べなかったが、『女ねずみ』以外の作品も、例えば『局部麻酔をかけられて』では、苛烈化するベトナム戦争の米軍による北爆を背景とした、「他者の痛みの共感」がテーマになっている。そのような作品を対象とする文学研究も、時代背景・社会状況と無縁であるべきはずはない。作家の発する警告を

真摯に受け止めるべく、あえて『人類は原子力で滅亡した』と完了形を用いて題された杵淵氏の論考は、文学研究が果たすことができる使命の一つの方向性を指し示していると言っても過言ではなからう。まさにこの時期に論考が公刊された意味は大きい。

この著作についてもう一つ付け加えるならば、研究書としてだけではなく、とりわけ序章と終章は、作品分析とはいささか文体が異なっており、作家に関する優れた伝記としても、やさしく楽しく読めるものになっている。筆者は終章を読んでいて、作家に対する著者の深い敬愛の念に満ちた筆の運びに、感動に近いものを覚えた。グラス未読の者は、序章と終章を読んだだけでも、この大作家の作品を手にしてみようという気になるはずである。

最後に、あえて蛇足の愚を犯しておこう。「女ねずみ」を読んだドイツ人の友人が私に、ここに書かれていることを表現するのになにも500頁に及ぶ作品にする必要はないのではないか、ここでの主張は20頁程度のエッセイの形で十分に表現できる、と述べたことがあった。これに反論するためには、この小説をあくまでも言語芸術作品として考察の対象にした上で、文芸としての側面とメッセージとしての側面がうまく調和しているかどうかを検証しなければならない。著者は確かに、作品の構造、語りの手法及び態度については多角的に分析、効果を実証して見せている。しかしながらあえて言うと、グラスが用いている文体、その言語そのものに迫った個所がほとんどないように思える。とりわけ、作品中に登場する数々の幻視の描写に用いられている言語を、著者ならばどのように分析するのか、ぜひ読んでみたいところであった。ただこれを深く追求しドイツ語自体を対象にすると、この著作に一般の読者に対するギュンター・グラス入門書という側面を持たせようとする、著者の意図との折り合いをつけることが難しくなるだろう。その意味ではこれはないものねだりなのかもしれない。

(早稲田大学出版 2013年)